

1. 幼児・児童における未来型能力	必要な能力	外界を認知する能力	
	なぜ未来型能力か？	<p>人がこの世に生を受けて、豊かな人間性を育み、いわば「人らしく」生きていくためには、自らを取り囲む外界からの様々な刺激を認知し、必要な情報を適切に取り込み、適応していく必要がある</p> <p><外界></p> <ul style="list-style-type: none"> ●物理的なモノ ・自然界の視聴覚情報 例)光や音、水や緑、動物 ・人工的な物体 例)乗り物や機械音、椅子やボールなど ●人間 ・他者 例)家族や、幼稚園の先生、友人 ・客体化された自分の姿 例)写真やビデオの自分 <p>※外界を認知する能力には、対人認知能力、社会的推論、コミュニケーション能力も含まれる。</p>	
	具体的な能力	客体化された自己と他者の認知能力	
	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)	<p><自己認知テスト> (刺激写真の中から自分を探す) 結果:正面写真については3歳児から100%正解しており、早い段階で自己を見分けられる。</p>	<p><他者認知テスト> (実験者が指定した写真のクラスメイト2名の名前を答える) 結果:3歳児、4歳児で100%を割る条件も。→坂元(1985)とはいくぶん異なる傾向</p>
→本節の結果は坂元(1985)とは逆であり、「他者の姿への注目」や「他者の姿の把握」よりも自己への注目のほうが先行。			
2. 幼児・児童における未来型能力の育成	育成方法の提案・実施	<p><自己認知></p> <p>近年のデジタルカメラ、ビデオカメラの普及によって、自己認知の前半部分である「自己の姿への注目」、「自己の姿の把握」の早期の成立がもたらされる？ 様々な自分の姿を観察させる機会を作り、適切な振る舞いには言語的・非言語的フィードバックを与えて自己認知を定着させる。</p>	<p><他者認知></p> <p>鬼ごっこのように友達の後姿を追う機会が多い遊びと比べて、テレビゲームでは友達の顔よりもゲーム画面に注意が向き、友達の様々な姿を捉える機会が減ったことも、他者認知の若干の低下の原因？ 他者の振る舞いに注意を向けさせる。遊びのなかで自分の姿だけでなく、他者と自己との関連性への気づきを促す。</p>
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		
3. 未来型能力を指導できる指導者育成	現状の把握 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		
	育成方法の提案・実施	指導者自身の認知能力を高め、且つ、適切な材料(ビデオや写真、遊び)などを用いて子どもの認知能力を高める教材の作成ができるよう、材料の選定から指導方法を教授する。	
	育成カリキュラム実施の結果 (当該領域のオリジナルデータ・知見)		